

『往生絵巻』に見る芥川龍之介

風花 小町

《1》

私達は現在『今昔物語集』に取り組んでいますが、先日、芥川龍之介が『往生絵巻』の素材として注目した話¹⁾に読み至りました。今回は、今昔と芥川、この両者の話を読み比べて見ることを通して、人間芥川的一端でも知ることができればと思うのです。

芥川龍之介は1892年(明治25年)東京生まれです。東京帝国大学の英文科に在籍し、英文学だけでなく仏文学やヨーロッパ文化との出会いもあり、東洋や日本の古典や歴史的話題も含め幅広く興味をもっていたようです。学生時代から少しずつ創作活動を始め、1914年(大正3年)22歳のとき初めて『老年』が刊行されます。

以降1927年(昭和2年)35歳で自殺するまでに148編²⁾の短編小説を書いています。

1922年(大正11年)芥川30歳までは主として歴史小説(切支丹物も含む)に主題を求め、この後は現代小説、自伝的小説へと転じて行ったといえます。『往生絵巻』は、1921年(大正10年)芥川29歳の時に出版されていますから、歴史物を扱った作品としては頂点を過ぎた頃のものと言えましょう。148編もある中で今回は『往生絵巻』ただ一作品から芥川龍之介を見ようとするのですから、針の穴から覗くようなものなのですが…。

注1) 『今昔物語集』巻第19 「讃岐の国の多度の郡の五位、法を聞きて即ち出家せる語」第14

注2) 『ザ・龍之介』第三書館 1985年1月 初版発行

《2》

『今昔物語集』巻第19には、讃岐の国の郡(今の善通寺市付近)に住まいする五位の官位を持つ男が、仏の教えを聞いて、即座に貴くありがたい仏の道に発心を起こし、出家したという話が出てきます。位が五位ということで、諸国に派遣された国守の職についていたものと考えられます。

この男は常日頃数人の郎等を引き連れ海や山に出かけ、漁や狩りに打ち興じ、殺生することを仕事のようにしていました。仏法を信じないで皆からただ恐れられてきた男が、ある日狩りをしたの帰り道、偶然仏(阿弥陀仏)の教えを説いている講話を耳にします。この男、この日はどう思ったか馬を下り、その場の聴衆を押し分けて講師の前にいき、自分を納得させる程の話をせよと言ってその場に腰を下ろしたのです。

というように、五位という当時高い官位についていた地方の長官が突如すべてを投げ出して出家までしたというくだりが、五位の男、その妻子、家来郎等、講師の心情をひとつひとつ追って読者に納得いくよう書かれています、

殺生ばかりしていた五位の男は、「私のような者でも仏の名を呼べば、仏は答えて下さいませんか?」「その仏さまはいかなる人を吉とされますか?」と問いかけます。

すると講師は、「西の方にいらっしゃる阿弥陀様と申される仏様は、今までに罪を犯した人であっても改心して仏様におすがりすれば、死後西方極楽浄土に迎え入れてくださり、仏にもなれましょう。」

「親が子をいとしいと思うように、弟子となった方々のことを思ってくださいませ。」などと答えます。

妻子もあった五位の男は、年齢を重ね、親として人として今までの悪業を悔い改める‘その時’に 至っていたのでしょう。その場で家来など皆の反対を押し切り剃髪をして出家してしまいます。そして西方にいらっしゃるといふ阿弥陀仏に直接の返答をいただくのだと「阿弥陀仏や い。お い、お い。」と声高に叫びながら、ただただ西に向かって旅立って行ったのでした。

妻子・役職を投げ捨ててでも出家して仏にすがりたいという人間五位の苦悩が大きければ大きい程、仏の偉大さ、慈悲深さがよりいっそう大きく伝わってきます。このことは大事なことなのです。

ところがです。芥川の『往生絵巻』では書き出しから今昔とはまったく異なるのです。

入道の姿をした五位であった男が『阿弥陀仏よや。おおい。おおい。』と狂ったように念仏を称えながら足早に人込みをかき分け進むところから始まります。

旅人、物売りなどが「妙な法師が来たぞ。みんな見ろ。」「気違いだ!」「天狗か狐でも憑いているのでは...?」とはやしたてます。犬やからすまでもが騒ぎたてます。五位の入道の出家までのいきさつが、この雑踏の中でうわさ話として語られます。

そしてこの雑踏は、わざわざ 20 種類もの職業を持つ人々で構成されているのです。童から翁まで年齢もさまざまです。

童、鮎売の女、薪売の翁、箔打の男、菜売の媪、物詣の女房、鋳物師、水銀を商う旅人、青侍、干魚を売る女、馬上の武者、櫃をおえる従者、...

余談ですが、中村真一郎は、芥川には「東京下町人特有の江戸伝来の職人氣質による凝り性のための名人かたぎ」があると書いていますが、ここの所はこの気質が大いに発揮されていると言えましょう。

もうひとつこの場面で特徴なのは、映画の手法を書き言葉で表現しようと試みたのではと思えるくらいのスピード感です。大路はさまざまな商いをする人、買う人、見物している人で混雑しています。そこを五位の入道が大声で叫びながら一途に西をめざして急いでいます。映画のワンシーンだと、カメラがいろいろな人の表情をアップで撮りながら、五位の入道の歩みと共に西へ西へといっきに移動して行くということになりましょうか。職業の異なる人が次々と登場して話をっないでいくという方法でうまく感じが出せています。芥川のこの作品は、映像的で、軽いタッチで展開していきます。

映像といえば、気になるちがいがあります。

『今昔物語集』では、五位の入道は阿弥陀仏の返答を求めて西に行くのに対し『往生絵巻』では、「身共は阿弥陀仏を見奉るまでは...。」となっています。今昔の時代には貴いものを直接じかに見るのは恐れ多い事であったのでしょうし、大正の頃ともなると“見る”ことの方が“聞く”ことよりもより確信を得ることができたのでしょう。この変更は興味深いところです。

《3》

西方をめざした五位の入道が死ぬくだりにおいても、二つの話は大きな違いを見せています。

『今昔物語集』では偶然行き着いたある寺で、そこの住職に入道自ら、七日後の自分の様子を見届けてほしいと頼んでいます。そこでこの住職はこの男の言動にただものでない強い信仰心を読み取ったのでしょうか。約束通り七日後に見届けに出かけています。そこで住職は、五位の入道が二股になった木の上から西の海に向かって「阿弥陀仏よや...。」と叫んだとき、海の中から妙なるこえで「ここに有り。」と阿弥陀仏が返答する声を共に聞くことになるのです。

『往生絵巻』にも老いたる法師は出てくるのですが、通りすがりに会った僧ということになっています。この僧、事の成り行きを尋ねた後で「いや、とんだ物狂いに出おうた。どれわしも帰るとしよう。」と無駄な時間を過ごした様に語っています。五位の入道の一念さと比べて、この老法師のなんとそっけないことか。阿弥陀仏の廣大無辺の慈悲など他人事の問題であるようです。

そして最後、もう一つ大きく異なる点があります。

『今昔物語集』では、木の上で亡くなった五位入道を見つけた住職は、入道の信念とそれにより達成された奇跡を見届けていたので、彼の本心からの仏心を大切に思い「鳥や獣にも被われよう」と思っていたかもしれぬと木の上に亡骸をそのままにして帰るのです。「風葬」を望んだ高僧もいたといえます。風雨にさらされ、鳥についばまれ、最後は塵になって土に戻っていくという究極の選択でありましょう。

『往生絵巻』では、老法師は「可哀そうに餓死んだと見える。」と物狂いの餓死ということで片付けて、「からすの餌食になるかもしれないから」と葬をしてやるのです。芥川は時代の民衆の気持ちを汲んで変更したのかもしれませんが、仏教とか信仰とかに重きを置いていません。芥川の関心は、西へ西へと阿弥陀仏を求めて行く狂おしい男の行動と、その結果奇跡の証しである白い蓮の華を口に咲かせてしんだ男の奇抜さに向けられていたのでしょうか。

《4》

吉田精一は芥川作品についてこう書いています。

「激情的な題材や...奇異な取材を扱いつつ、現代人の立場から冷静な心理解析を加えて、銀のピンセットで人生をつまんでいるような、繊細な物語的作品を残した。」「知性の上では奇跡の实在や熱烈な死をもいとわぬ信仰をみとめつつも、自分自身は結局傍観者でしか有り得ず、全身的な信者になり得ない存在としての彼自身...。」

今回二つの作品を比べながら読んでみて、吉田氏のこれらの言葉がすっと納得されて私の中に落ちてきます。

芥川は、彼自身の立っより所となる心の安住する'場' というものを持てなかったのでしょうか。五位の入道のように、実際に汗や涙を流して何かをつかもうとするタイプの人ではない。大正の終わり頃から、自分が何ものかという確信が持てない漠とした不安をかかえ、内なる不安と闘いながら作品を書き続けたのです。

我々の住む今の社会においても、情報過多になり、頭でわかっているつもりになっていることもよくあります。時間はあるし、食べることにこそ困らなくなった現代、心の問題は大きなテーマになりましょう。形がなく見えない物だけにやっかいです。

2005年12月7日記

《参考にした本》

- 『今昔物語集』本朝部 中 池上洵一編 岩波書店 2001年7月発行
『芥川龍之介全集』第三巻 筑摩書房 1958年4月発行(昭和33年)
『地獄変・偷盗』芥川龍之介著 新潮社 1968年11月発行(昭和43年)